



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1991
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

夜明けの空に 輝く聖母

1 「新しい歌を主に歌え、(…)その尊い御腕は勝利を得た。」(詩篇97・1)

主に向かつて歌いましょう。今日私たちが訪れているのは、初代キリスト信者が至聖なるマリアのために建て、今はローマをはじめ世界中のカトリック信者が必要な修復を施してその古代建築の雄大さを回復しようとして援助している大聖堂です。私は、その人々の寛大さと感性を称え励ましたいと思います。私たちは、「ローマ人の救い」である聖母マリアのもとにきました。無原罪の御宿りという「新しい歌を歌う」ために私たちはここを訪れています。

2 今日この典礼は勝利について語っていますが、それは戦いに輝きます。この歴史の背景とは対照的に、夜が昼に場所を譲り、闇が光に支配される時、マリアは天国の夜明けのように輝きます。この罪の中で、「うその父」(ヨハネ8・44)は光の父に對峙します。光の父は、神が男と女とを造られ、神御自身である永遠の生命に与らせるため友愛の恩寵をお与えになった人類を、御自分の方に引きよせること

3 したが、同時に典礼は勝利に輝く勝利は、創世の書の言葉を使っています。その戦いは人類における罪の歴史の発端に由来します。今日この典礼は、「この戦いについて語っています。その戦いは人類における罪の歴史の発端に由来します。今日この典礼は、この戦いについて語っています。その戦いは人類における罪の歴史の発端に由来します。今日この典礼は、この戦いについて語っています。その戦いは人類における罪の歴史の発端に由来します。」

4 われる(神は救い主である)という意味です。「救う」とは、悪から解放すること、「悪を克服」することです。これはまさに、創世の書の言葉が比喩的に語っていることなです。「彼はへびの頭を踏みくだくであるう」。けれどもこの最初のメッセージは、すでにマリアの子である救い主が支払うであろう代償について語っています。私たちは救い主・マリアの子イエズスによって、支払われた代償を知っています。私たちは「高値で買われたものである」(コリント①6・20)ことを知っています。キリストの十字架は、救いの歴史である人間の歴史の中心を占めています。マリアは十字架のもとに立っておられる。勝利を収められるのは、まさに十字架の上であり、十字架をとおして始めて彼の王国は「終わることがない」のです。十字架に釘づけられた御子の「右腕」が罪に対する勝利をもたらしたので。

5 これが、今日の典礼で教会が祝うことです。聖なる処女マリアの無原罪の御宿りはここに始まります。御子は、マリアの存在の最初の瞬間、すなわち受胎の時から、マリアをアダムの子の遺産から守り、そうすることによって、御母において、御母を通して勝利を得たのでした。マリアは全ての人と同じように、贖われる必要がありました。そしてマリアは御子の十字架の上での犠牲の代償を通して贖われます。しかし、マリアは特別な方法で贖われました。教会は、マリアの無原罪の御宿りを祝って、キリストの御母の比喩的な例外的な贖いを宣言します。今日、使徒と共に教会は、主イエズス・キリストの父である神を賛美します。この祝福の言葉は、キリストによって贖われた全ての人について述べています。そして、特別な、例外的な意味において、「あなたにあいさつします。恩寵に満ちたお方。主はあなたとともにおいでになります」と天使ガブリエルが言い、エリザベトが「あなたは女の中で祝福された方」と叫んだ相手、マリアについて述べているのです。(ルカ1・28、42)

「公現と聖母」

福音の最初の伝え手



◆ 今日の主の御公現の祝日は、神の子の母として「キリストより先に人間の救済史上に現れた」(回勅『救い主の母』3) 聖母を思い出すにあたり、(…) 特別の意義があります。というのも、聖母はすべての人間の中で最初に救い主を世界にお示しになったからです。聖母は今日も、この福音の最初の伝え手としての地位をお持ちです。それで、私たちは「元后あわれみ深き御母」(『サルベ・レジーナ』を祈る時、「あなたの胎より生れ出た」とうとき御子イエズスを、われらに示し給え」と聖母にお願いするのです。今日、私たちは「この逐論の終らんのみ」だけではなく、今イエズスを示してくださいと、聖母にお願いしたいと思います。

◆ 聖母はご自分の聖なる御独り子、贖い主を世界にお示しになる。これが御公現の秘義と典礼の意味です。時間的に見れば、聖母は受肉されるみことばの到来に先行されます。聖母は、その聖性と、神の御子・みことばに対する信仰の両面において、みことばの弟子である私たちを導かれます。聖母は「正義の太陽」である私たちの主キリストに先立つ夜明け、「暁の星」です。みどり子を訪ね、イスラエルと全人類の救いのために神がどれほどのこ

とをなさったかを知って不思議に思い、驚嘆する人々に、聖母は、イエズスが御自身とその使命についてお話しになるよりも早く、イエズスのことを話しました。昔の典礼賛歌の中で、聖母は「海の星」と呼ばれています。聖母の信仰は、この世の荒波や嵐の中にあっ

◆ 親愛なる兄弟姉妹の皆さん。今日の典礼はヨルダン川でのイエズスの洗礼を思い出させます。それは唯一の例外の洗礼です。というのは、その洗礼を通して贖い主は御自身も、回心を必要とする者である私たちの一人であることをお示しになったからであり、またこのようにして御自分が表現されるために来られた、全ての罪の赦しを預言なさりたかったからです。

◆ 福音書によるとその使命の実現のために、天が開け聖霊がイエズスの上に降りました。その出来事は、御父が神の父子関係を宣言された時、完全な意味を持つに至ります。「あなたは私が喜びとする私の愛する子である」(ルカ3:22、マルコ1:11)

主の洗礼と 私たちの洗礼

て私たちに道を示し、誤りを一掃して、真理なるキリストへと導き、私たちの無知の暗闇を照らす光のようです。マリアは、人間を死と罪から解放し、神の子供にするために私たちのところに来られた御子を、どこに行けば見出せるかを示してくれるベトレヘムの星のようです。マリアは、信仰に近い人も遠い人も、イスラエル人であろうとなかろうと、全ての人々をベトレヘムの星のようにキリストに近づけます。すなわち、信仰を一層深めることができるはずで確信している人も、ま

◆ 神の御子が後に制定された秘跡とは異なりますが、この出来事は、人間がキリストの生命に新しく生れ変わる洗礼の儀式を前もって示すものでした。それで、主の洗礼は私たち自身の洗礼のことを思い出すよう、そしてキリストの教会に入することを許すこの儀式がもつ全ての

◆ 意味を理解するよう招きます。洗礼の時、私たちは「印章」を刻みつけられます。私たちが決定的にキリストのものとし、神の生命の成長原理である個人的聖別を認める「封印」がなされるのです。この聖別は、全ての信者の共通の司祭職、すなわち

◆ 聖母は、キリスト御自身が福音を説く前に、キリストについて語りました。それで、パウロ六世は使徒的勅告『福音宣教』(82番)の中で、聖母を「福音宣教の星」と呼んでいます。「聖霊降臨の朝、聖母は聖霊の御働きのもと福音宣教の始まりを祈りながら見守っておられました」。教皇がこのように書き記し、表明された望みを、私も自分のものにしたと思います。「願わくは、聖母が常に福音宣教の星であら

◆ 私たちが受けた洗礼について考えると、私たちの存在を占有し、私たちの全生活を聖化することを望まれたキリストに、少なくとも感謝しないわけにはいきません。また私たちは、洗礼の時から多くの賜によって私たちがキリスト者を豊かにしてくださっている聖霊にも感謝しなくてはなりません。

◆ 洗礼はまた、職位的司祭職の価値を深く理解させてくれます。洗礼の秘跡の通常の授与者は司祭だからです。事実、キリストは洗礼を授ける使命を使徒たちにお任せになりました。「行け、諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊の名によって洗礼を授けよ」(マテオ28:19)

◆ 主の御公現から聖霊降臨まで、聖母はイエズスを人間に与え続けられます。今日もまた、聖母は教会の中で、教会を通して、イエズスをお与えになります。聖なるおとめよ、主の御公現の祝日にあたり、ふたたびあなたの御胎内の御子イエズスをお示しください。私が道と真理と生命を知ることができるよう、イエズスをお示しください。アーメン。(一・六)

◆ このように考えてみると、私たちの注目は司教会議のテーマである司祭の養成に向けられます。この種の養成は、司祭を、洗礼を始め諸秘跡の良き聖務者(執行者)とすることを目標とすべきです。洗礼のために司牧的な良い準備が必要です。成人が洗礼を受ける時は、洗礼志願者の要理教育には、志願者にいっしょに信仰の見習いをさせることも含まれています。幼児洗礼では、家族全員が自分自身の信仰を深めるよう勉強し、自らの責任をより真剣に引き受けることによって、幼児洗礼の準備に参加するよう求められます。

◆ このシノドスの指針が、牧者の心と強い信仰心をもって、洗礼の任務を遂行できる司祭の養成に役立つよう、聖母に祈りましょう。(九〇・一・七)

「ベトロおじさんの仕事」
ルイス・ラベントス著
村林祥子訳
定価八七六円

説教・講話・書簡等の抄訳

社会、文化、経済の各分野がいかに複雑になるうとも、国や社会が超越的な道徳基盤なくして栄えることはできません。これは、東欧社会だけでなく西欧にも当てはまります。弁証法的唯物論も実践的唯物論も、今日人類の希望を支えることはできません。

私たちの希望をどこにおけばよいのでしょうか。十年前、当時のカトリケントークは、「キリストの愛に勝るものなし」というテーマを掲げていました。キリストが地上にもたらされた愛が、私たちの唯一の希望です。現在も未来も、神のみ旨を実行しようと努めるならば、その希望を証明することができます。神学と（みことば）の宣言は、流行によって左右されるものではなく、福音宣教の中で堅固なものでなければなりません。霊的な誤りや障害による混乱の中であって、信者は信仰と信仰から生じる行いに関して刷新されなくてはなりません。キリスト教信仰のために錯（さく）のようなしつかりとした考えと行動をもたらず深い内的生活に基づいて、証ししなければならぬのです。

カトリックの組織や会に所属しているだけでは十分ではありません。基準は社会的活動や有用性にあるのではなく、問われているのは、私たちの信仰に対する個人的な心構えです。それは、深い内的生活によってのみ身につけることができます。社会的政治的な関心のみで自分自身が捕われぬよう注意してください。キリストを信じる者としての責任において何よりも最初に正さなければならないのは、行動様式や考え方から、まずそれについて考えてください。

偽りの奴隷ではなく 真理に仕える

このような態度によってのみ、このカトリケントークのモットー「御旨の天に行わること、地に力と優先権を与えよう。その意志が地上における私たちの考えと行いの指標となる時、私たちはフアライサイの偽りの奴隷ではなく真理に仕えることができるのです。その時こそ、破壊するのではなく建設し、停滞を続けるのではなく真の発展に貢献することができるでしょう。

「御旨の天に行わること、地に力と優先権を与えよう」とは、神の国建設のため協力者となることです。こうしてのみ、未来のために私たちの義務を果し、神が創造なさったものに対して敬意を払いつつ地上の所有物を用いて、キリスト信者の務めを果すことができるのです。(90・6)

悪の力と戦う

「罪」シリーズ ⑩ (つづき)

1 創世の書3章9〜15節による「罪」と、人間の最初の罪は「不従順」として、つまり創造主の意向を表す掟に敵対するものとして描かれています。人間は（男性も女性も）この行為に対する責任があります。それは、アダムが自分のことを完全にわかっていた上で自由にそれを行ったからです。ある目的に向かつて行動する人間の歴史の中で、全ての自罪に同じ責任が見出せます。この点について創世の書に記載されていること、すなわち主なる神は二人に（最初は男に、それから女に）、彼らの行為の動機を「どうして」と尋ねられたのは意味深長です。これによってこの行為の本質的な意義は動機、つまり行為の目的に関係があることがわかります。神がお尋ねになった「どうして」とはどんな動機で？という意味ですが、また何の目的で？ということをも示しています。ここで女は（男と共に）「へびにだまされた」と、サタンに促されたことと言及しますが、この答えから次のことを推察しなければなりません。「神のようになるだろう」と言ってサタンが提案した動機は、創造主の禁令に決定的な方法で背くことに手を貸しました。そして本質的な次元を最初の罪に与えたのです。罰の宣告の中で神は直接にはこの動機について

2 人間最初の罪に対する答えに続いて、神がサタン、黙示録の著者が「全世界を迷わす昔のへび」(12・9参照)と記した者に注意を向けられたのは、意味あるふさわしいことだといえます。創世の書で主は「お前は、そのようなことをしたのでから：のろわれたものとなろう」と仰せられます。この呪いの言葉は、キリストも「うその父」(ヨハネ8・44参照)と呼んだ蛇に向けられたものです。同時に、最初の罪に対する神の答えには、「うその父」と女、その末との間の歴史全体にわたる戦いについても告げられています。

3 第二バチカン公会議は、この問題について非常に明白に宣言しました。「やみの権力に対する苦しい戦いは、人間の歴史全体に行きわたっている。それは世の初めから始まったものであって、主が言われるように、最後の日まで続く。人間はこの戦いに巻き込まれているので、善に着くためには常に戦わなければならない、神の恩寵の助けと大きな努力なしには、自己の統一を確立することもできない。」(『現代世界憲章』37) 別の文章にも、人間の誰しもが戦い抜かねばならない「善と悪との」戦いについて、さらには「つきりと表明しています。人間は自分自身の力では悪の攻撃を効果的に退けることができないことを発見し、各自が鎖で縛られているように感じる。」しかし公会議は、贖いについての真理と信仰の確信とを対置させた形で、力強く断固として述べています。「人間を解放し力づけるために主みずからが来られて人間を内部から再生し、人間を罪のどれいとして捕えていた『この世のかしら』を外に追い出した。(同13)

4 教会の教導職のこうした数々の教えは、まず創世の書3章15節で、後には聖書全体で示された、罪と贖いに関する真理を、明確で均質な方法で今日も繰返しています。『現代世界憲章』の言葉をもう一度読みましょう。「人間は神によって義の中におかれたのであるが、歴史の初めから、自由を乱用し、神に對立するものとなり、自分の完成を神のほかに求めた。(13) 最初の罪の場合であれ、人間の他の全ての罪の場合であれ、まさしくこれは言葉の示す厳密な意味での罪の状況です。しかし公会議は、最初の罪は「悪霊に誘われて」(前出)犯したことを決して忘れません。知恵の書に、「死がこの世に入ったのは、悪魔のねたみのためだった。悪魔に属するものはそれを体験する」とあります。(2・24) この場合の「死」は、罪それ自体(成聖の恩寵によって与えられた

「祈りと神の現存」

フランシスコ・ルナ著
新田壮一郎他訳
定価九二七円

不変の教え

聖なる生命の喪失という靈魂の死)と、光栄ある復活の希望を奪う肉体の死との両方を意味しています。〔善悪を知る木〕に関する法を犯した人間は、神なる主によって、地上での歴史全体にわたって(生命の木)から離されてしまいました。

5 人間の歴史における最初の罪とその遺産については、創世の書3章15節の神の言葉「私は敵意をおく」で告げられた戦いの見通しが含まれています。この結果として、もし罪が初めから人間の自由意志と責任とに連なっていて、人間と神との間に(劇的な)問題を繰り広げるなら、人間が罪の故に「やみの権力に対する苦しい戦い」(『現代世界憲章』37)に従事していることも当然ながら真実であることとなります。人間は、自分自身や自分の地上での歴史より遙かに大きなあの不義の秘義の中に巻き込まれ、鎖に縛られているといえるでしょう。(前出13参照)

エフェソ人への手紙によると、「私たちが戦うのは血肉ではなく、権勢と能力、この世のやみの支配者、天界の悪霊だからである」(6・12)歴史全体だけでなく、特に現代を圧迫しているぞっとするような罪の現実を考えると、「人間は…やみの権力に対する厳しい戦いに従事している」という聖書の、そして公会議の恐るべき真理にひき戻されます。しかし、このやみの権力の秘義には、そもそも初めから冷酷な罪の宣告という悪夢から歴史を解放する光——救世主のお告げ——が照らされていることを忘れてはならないのです。

病人の祝福

〈苦しみの福音〉

イエズスと苦しみ

つい先ほど朗読された聖マルコの福音書によると、人々は、イエズスに触れていたがために、病人を担架に乗せて連れてきました。(マルコ6・55〜56参照)

イエズスが病に伏す人々を特別に愛しておられたことは明らかです。福音書を読むと、病に伏す人や苦しむ人を見て、心を動かされ憐れを感じるイエズスの姿が目につきます。

(マルコ1・41参照) 幾度も御手を伸ばして、彼らにお触れになりました。(マテオ20・34参照) 幾度となく病を癒し、幾度となく罪を許して人々に新たな希望をお与えになりました。(マルコ2・1〜12参照)

イエズスは今も病人のすぐそばにおられます。苦しみを背負う皆さん一人ひとりの傍らにおいでになりま

す。孤独を感じ、恐れを抱き、誰にも苦しみか理解されないと思うとき、イエズスは傍らにいてくださるのです。特にイエズスは臨終にある人や不治の病に苦しむ人のそばにおられます。すぐそばにおられるのは、御自身が苦しみを体験されたからです。ゲッセマニの園で、最高のいけにえを目前にして、恐れと深い苦悩を経験されたのです。(ヨハネ20・20参

照)

神の御子は人となり、私たちの間に住み、罪を除いて全てにおいて私たちと同じとなり(ヘブライ4・15参照)、そうすることによって、私たちを罪とその代償から贖って(ローマ6・23参照)くださったのです。イエズスは人間の苦しみの秘義から逃れようとはされません。苦しみを受入れ、御受難と御死去によって希望と永遠の栄光への道を開いてくださったのです。十字架の逆説とは、神の救いの力が人間としての苦しみのうちに現れたことです。神の無限の強さは人間の弱さのうちに示されました。神の栄光は御独り子の傷ついた御体において示されたのです。

病と改心

皆さんは、洗礼によって御死去と御復活の秘義にあずかり、イエズスと一つになり(ローマ6・5参照)、また、罪と死に対する主の勝利の証人として世界中に送られました。皆さんが信仰と愛によってイエズスとの一致を深め、ますます主に似たものとなる、これがイエズスのお望みです。(ローマ8・29参照) 病で苦しむ皆さんが自分の体を通して神の恩寵の勝利をもたらす力を示し、世界に「苦しみの福音」を宣言するよう



主は望んでおられます。すなわち、御受難によって人間の苦しみに贖われ、またそれが復活の喜びと希望を証するものとなる可能性が生れたのです。(サルヴィフィチ・ドローリス)26参照)

皆さんを精神と心のより深い改心に導き、そうすることによって一層のこと御自身に近づけるため、イエズスが皆さんの病を恩寵として使われることを喜んで受入れてください。主は、皆さんの弱さを活用して、皆さんが知恵と霊的な洞察力と理解力を増すよう助けてくださいます。キ

リストとひとつであれば、苦しみが教会と全世界の役に立つ豊かな霊的みのりをもたらすことを確信してください。私たちの祈りと苦しみ、私たちがする良い行いはキリストの神秘体全体に良い影響を与え、私たちに分からねぬ方法であっても多くの善を産みます。これこそ、聖パウロが宣言している教えです。「私は今あなたたちのために受けた苦しみを喜び、キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けた所を満たそうとする」(コロサイ1・24)



『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費
 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393